

キノコの事を思う

大野 和子

私とキノコの出合いは、幼い時父の実家の青梅で、毎年秋になると、祖母と山に入りきのこ狩りをした事です。祖母は前日下見に行き、そっと落葉で隠しておいて、「千本シメジ、ホウキダケ」と言って、採らせてくれました。「黒ん坊¹」というのもあったけど、これは、あまり美味しくないと言って採りませんでした。一体今となっては、何というキノコだか、見当もつきませんが…

それからキノコとは無縁の生活で、高校の生物部も魚類班だったし、その頃、動物行動学の本が面白くて、生物部仲間とローレンツの本を読んでいました。その後息子が5才位の頃、近くの小学校で飼っていたカモが大好きだったので、野鳥の会に入り探鳥会へ行ったり、私も子育てが一段落した頃、動物行動学がローレンツの頃より面白くなっていたので、そんな本を読んだり、「寿命を決める社会のオキテ」という本を読んだ時、外側から動物の行動を観察するだけでは解らないなと思い、早稲田の社会人講座の「比較内分泌」をとったり、理科大の「ゲーム理論」をとったりしていました。

それと並行して、ずっと自分のフィールドにしていた船橋県民の森のキノコが気になりはじめていて、その後、コミックの「もやしもん」、イナックスの「考えるキノコ」に出会い、どうしても菌類を



知りたくなりましたが、大学の社会人講座では、そんな講座が見つかりませんでした。そんな時、吹春先生に出会えて、本当に幸せだったと思います。

昨年、千葉村へ行った時、初めて見る息をしているキノコの佇まい、冷たい湿った感触が新鮮でした。会いたかったキノコに会えて、なんかアニメの萌えキャラが、三次元になった感じでした。それと、きのこは見るものと思っていたのが、食べるものでもあるんだと、幼い日のきのこ狩りの感触を思い出しました。

注1：きのこの語源・方言事典（山と溪谷社、1998）によると、「くろんぼ」は、群馬・埼玉・山梨でクロカワ（黒皮）の古名。（編集担当）